明治神宮のレガシーと東京オリンピック・パラリンピック

東海大学観光学部教授　田中 伸彦

1. 大正時代の人々が残してくれた緑のレガシー：明治神宮

冒頭から少し固い内容で恐縮だが、先人の思いを共有するために、まずはこの文書を読んで頂きたい。ちなみに、これは、大正時代、明治神宮奉賛会（会長：公爵 徳川家達）が、明治神宮外苑を寄進する際に、宮司に対して宛てたものである。

明治神宮奉賛会　「外苑将来の希望」

今や外苑全部を貴職（筆者注：明治神宮宮司）に引継ぐに方（あた）り、将来御注意を請うべき条々左に申入置候

(1) 外苑は明治天皇及昭憲皇太后を記念し、明治神宮崇敬の信念を深厚ならしめ、自然に国体上の精神を自覚せしむるの理念を基礎とし、一定の方針を以て設計造営せられたるものなるを以て、今後、之が管理及維持修理上に於いても常に右理想を失はざる様御注意あり度（たく）事

(2) 外苑は・・・（中略）・・・上野、浅草両公園の如きとは其性質を異にするを以て、今後、外苑内には明治神宮に関係なき建物の造営を遠慮すべきは勿論、広場を博覧会場等一時的使用するが如き事も無之様御注意あり度候

（アンダーラインは筆者による）（参考：越沢 2001）

戦前の文章なので、今の日本社会には沿わない表現があるかもしれないが、今回そこは論点ではない。

重要なのは、アンダーラインを引いたところである。噛み砕いて言えば、「明

治神宮外苑は民間（奉賛会）の手でしっかり目的を持って創った。それを寄進するのであるから、後世の人もその方針に従って欲しい。神宮にそぐわない建物は今後建てて欲しくないし、苑内では閑静な風致を維持するためにイベントさえ開催して欲しくない。」となろう。

先人が残してくれた遺産のことを、近年日本では「レガシー」と呼ぶことが多くなった。この言葉をそのまま借りれば、明治神宮は、**「大正時代の人々が明治時代に想いを馳せて、現代の私たちに残してくれた緑のレガシー」**と言うことができよう。

19 世紀の後半、世が江戸時代から明治時代に移るやいなや、日本では、一気に近代化／西欧化が進んだ。明治時代は 45 年目に幕を引くこととなるが、明治天皇、昭憲皇太后の棺が納められたのは、帝都東京ではなく、古都となった京都の伏見桃山陵であった。その事実を受けて、東京でも明治を偲ぶため、後世に残るシンボルをつくるべきだという声が高まり、神宮の造営が計画されたのである。

そして、当時の南豊島御料地に内苑、青山練兵場に外苑を造成することが決まり、内苑は和・伝統を重んじた佇まいに、外苑は洋・現代を取り入れた佇まいにするように明確なコンセプトが定められた（**表 1**）。なお、今は首都高速道路の高架に埋もれて見る影もないが、当時は両苑地を結ぶ内外苑連絡道路も造られた。

内苑・外苑が造成されるまでは、南豊島御料地も青山練兵場も荒れ野のような光景が続いていたそうである。しかし、今では見事な緑が蘇り、自由に出入りできる都心の貴重な憩いの場として、多くの人々に親しまれている。

表 1　明治神宮造営のコンセプト

和・伝統の「内苑」、洋・現代の「外苑」
内苑：古式様式による伝統美の庭園
「神苑と林泉を調和させた造園」
献木と人の手で創られた森（常緑広葉樹林）
外苑：現代式庭園
「明快にして、快適な散策園ないしは記念園」
ビスタ景観（絵画館銀杏並木）・プールバール
厳かな風致の形成
閑静な環境下における競技場の導入

（参考：内山・蓑茂1981）

平成に生きる我々は、大正時代の人々が残してくれたレガシーのおかげで、潤いのある森林文化を都会で享受することができるのである。

2. 2020 年の東京

ところで、2020 年は何の年だろうか？

多くの日本人は、「東京オリンピック・パラリンピック」の開催年だと答えるだろう。もちろん正解である。2020 年には、オリンピックが 7 月 24 日から 8 月 9 日まで、パラリンピックは 8 月 25 日から 9 月 6 日までの期間で、首都東京を中心に開催される。日本中を巻き込んで、盛大なスポーツの祭典が繰り広げられるわけである。

東京でのオリンピック・パラリンピックの開催は、2013 年 9 月にブエノスアイレスで開催された国際オリンピック委員会（IOC）総会で決定し、日本は歓喜の輪に包まれた。日本で行われる夏の大会は 1964 年の東京大会以来、実に 56 年ぶりとなる。冬季を含めると 1972 年の札幌大会、1998 年の長野大会に続き 4 度目であり、21 世紀に入ってからは日本で初めて開催される大会となる。また、同じ都市での 2 度目の開催はアジアでは初となる。日本人にとって、2020 年は何をおいても東京オリンピック・パラリンピックが真っ先に頭に浮かぶことについて、私も何の

写真 1　明治神宮は 2020 年に創建 100 年を迎える。その年は東京オリンピック・パラリンピックの開催年でもある（著者撮影）

異存もない。

しかし、2020 年は、実は「明治神宮創建 100 年」の記念すべき年でもあることを忘れてはいけない。上述のとおり、明治神宮は、大正時代の人々が明治時代に想いを馳せて造営した、近代日本を象徴するレガシーの聖地である。その明治神宮が創建 100 年を迎えるのである。このことは明治神宮を参拝すれば隠すことなく掲示されている事実であるし（**写真 1**）、そもそも 100 年前から分かっていたことである。東京オリンピック・パラリンピックの開催年も、明治神宮創建 100 年の記念すべき年も、奇しくも 2020 年なのである。

3. 新国立競技場建設を巡る問題

2020 年オリンピック・パラリンピックの開催を間近に控えて、現在外苑の傍らにある国立競技場（正式名称は「国立霞ヶ丘競技場」）のリニューアル問題が、建築デザイン、施工費用、工期などの問題で、大きな物議を醸している（槇 2013、槇・大野 2014、森 2014 など）。今、私は「外苑の傍ら」と書いたが、実を言うと、国立競技場は、1956 年まで明治神宮外苑の一部であり、「明治神宮外苑競技場」と名乗っていた（後藤 2013）。1964 年の東京オリンピック招致に際し、土地が分割され、国に移管され、建て替えられたのが国立競技場である。そういう意味では、国立競技場は上述の「外苑将来の希望」の対象地なのである。まさにその場所で、閑静な風致を揺るがす大問題が、国民の多くを巻き込む形で生じてしまったわけである。

本稿を校正している 2015 年 12 月の時点では、旧国立競技場は既に解体され（**写真 2**）、跡形もなく整地されている。しかしながら、新たな競技場の建設はなかなか進んでいない。一旦デザインが採択されたザハ・ハディド氏の設計案は白紙撤回され、コンペをやり直すこととなった。その結果、二つのグループから新たなデザインが提出され、日本スポーツ振興センター（JSC）の大東和美理事長は 2015 年 12 月 22 日午前、建築家の隈研吾氏が設計し、大成建設などとともに提案したとされる案を採用することを政府の関係閣僚会議（議長：遠藤利明五輪担当国務大臣）に報告し、安倍晋三首相が了承した。このコンペのやり直しに伴い、2015 年のイングランド大会

で日本人の大きな注目を浴びるようになった 2019 年に開催されるラグビーワールドカップ日本大会を新国立競技場で行うことは断念され、2020 年 7 月のオリンピックに供用するにはぎりぎりの 2019 年 11 月までの完成を目指し予定が組み直されつつある。

新国立競技場の問題は 2015 年を通じて、マスコミに大きく取り扱われ続けた。ところが、これだけのドタバタの中で、2020 年が明治神宮創建 100 年であるということについての議論がほとんど聞かれなかったのが、どうも私には腑に落ちない。大正人が残した明治時代のレガシーを適切に維持保全しながら、その上に 2020 年のオリンピック・レガシーを積み重ねていくことが、何をさておいても重要であるはずではないだろうか。

明治神宮外苑は、何はさておき風致を保全することが大切な場所である。現に、我が国の都市計画法における「風致地区」第 1 号は明治神宮周辺地区である（1926 年指定）。風致地区には、通常高さ 20m 以上の建造物は建てることができない。そのような場所にありながら、旧国立競技場でさえ高さが約 30m（照明灯を考えると約 52m）もあり、来訪者に景観的な圧迫感をやや与える状況にあった。それが、ザハ・ハディド氏の設計案では旧競技

写真 2　解体作業中の国立競技場（著者撮影）

場をはるかに超える約 70m の巨大な建造物が建築されようとしていたのである。念のため、70m のデザイン案を提出したことの非はザハ・ハディド氏にはない。事前にこの地域の地区計画が 70m までの建物を建築可能なように変更されており、ザハ・ハディド氏はその規定を遵守したに過ぎないのである。なお､最終的に採用された隈研吾氏と大成建設らのデザイン案では､高さが 49.2m とされている。デザイン的にも神宮外苑との調和が協調されているとともに、高さ的にも圧迫感が薄れたのは事実である。このデザインが、明治神宮の景観を損なわない、更に言えば新たな風致の創出に貢献することを願うのみである。

4. 明治神宮内苑・外苑とは

内苑は、100 年前、荒涼とした御料地に、日本各地から献木された約 10 万本の木々を、人の手で計画的に植樹することによって創られた人工の森である（松井ほか 1992、今泉 2013）。当時から、まさに 100 年後を見据えて森林の変化を予測したうえで、植栽計画が組み立てられた。それが今では、威風堂々とした和風の樹林に成長したのである（**写真 3**）。

一方、外苑は洋風の庭園様式や欧米的なスポーツ空間、欧風建築を導入した近代的な造形を誇り、特に絵画館前のイチョウ並木の美しさには定評がある（**写真 4**）。

つまり、**表 1** に示したとおり、和・伝統の「内苑」、洋・現代の「外苑」という対比的な空間構成によって、日本古来の伝統と、近代日本の象徴とのコントラストをなしていることが大きな特徴である。そして内苑も外苑も、日本の文化と近代化を内外に伝えるためのレガシーとして、老若男女が季節を問わず､様々な目的で訪れて憩うような､今の都心に欠かせない場所となったのである。

さて、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックを巡って今起きている各種問題と関わりが深いのは外苑の方である。外苑は、幾度かの計画変更を経て創建 6 年後の 1926 年に最終的に全体が完成した。上述のとおり、1926 年の時点で、既に外苑には近代スポーツの象徴として陸上競技場や野球場等の施設が組み込まれていた。ただし、これらのスポーツ施設はお祭り

写真 3　明治神宮内苑の参道（著者撮影）

写真 4　神宮外苑絵画館前のイチョウ並木（著者撮影）

騒ぎを想定したものではなかった。あくまでも神宮の苑地という閑静かつ神聖な風致的空間の中で競技を行うことが前提とされていた。

また、外苑中央の絵画館前にある大芝生地を核として、中央の緑量は薄くし、同心円状にだんだん緑を濃くしていき、外周植栽は濃密な森林を配置するというデザイン構成がとられた。今のように、外周付近でスポーツ施設が派手に出しゃばることは想定されていなかった。

加えて言えば、中央の大芝生地も本来は近代ドイツ式のもので、人が立ち入ることを前提としない鑑賞用の芝地であった。しかし、第二次世界大戦直後の米軍接収などの経緯を経て、今ではこの芝生空間も野球場と化してしまった。現在ここで野球を楽しむ人たちに悪意はなかろうが、結果的には近代日本の閑静な風致を維持したいという大正人の希望を反故にしている実態は動かしがたい。

つまり、明治神宮外苑の風致は、スポーツ施設に「庇を貸して母屋を取られる」状況に陥り、閑静な空間が消滅に向かっているのである。

5. オリンピック・レガシーとは？

明治神宮に対して大正人が 100 年前に希求した「明治時代のレガシー」が、新国立競技場などの建設によって損なわれかねない状況にあること、そして、その状況がスポーツ関係者の間にも、森林文化に興味がある人の間にもシェアされていないことを述べてきた。そのような中で、現在の明治神宮は外苑地区においてレガシー存続の危機に陥っている。この状況を看過してよいのだろうか。

実のところ、レガシーを残すことの大切さについては、IOC 自身が東京に対し、2020 年オリンピック・パラリンピックを開催するにあたって、強く求めている事項の一つなのである。

IOC の「Olympic Legacy 2013」によると、オリンピック・レガシーとは「開催都市に残され得る、スポーツ、社会的、経済的、環境的な利益で、開会式前に経験されるものもあれば、大会終了後、数年が経っても目に見えない可能性もあるもの」とされている。

そして、オリンピック・レガシーの五つの性質として、

（１）スポーツレガシー
（大会後も利用されるスポーツ施設、スポーツ参加人口の増加、競技力向上）
（２）社会レガシー
（文化・歴史・生活様式の PR、誇りや社会的平等、教育、ボランティア、官民協力）
（３）環境レガシー
（公園や緑化スペース、都市再生、持続可能性）
（４）都市レガシー
（産業荒廃地等の都市再開発、景観整備、公共交通インフラ）
（５）経済レガシー
（経済向上、企業力、周辺経済効果、雇用、観光客の増加／観光産業の発達）

を挙げている。

更に、オリンピック・レガシーはポジティブな側面だけではなくネガティブな側面もあり、計画的に残せるものもあれば偶発的に残るものもあるとされている。また、目に見える有形のものも、目に見えない無形のものもあるので、オリンピック・レガシーの概念はサイコロのキューブのように表すことができると言われている。それを我々はレガシーキューブと呼んでいる（図1）。

このレガシーキューブに沿って言えば、新たな国立競技場は色塗りで示した部分、つまり「計画的で有形、かつポジティブ」なレガシーとして後世に残さなければいけないはずである。それが現在、「計画的で有形だがネガティブ」なレガシーになりかねない点が問題視されたのである。加えて、意図せぬ財政的な追加負担が生じれば、「偶発的で無形、そしてネガ

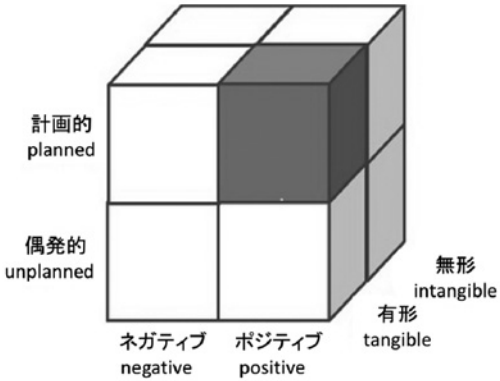

図１　レガシーキューブの概念図（参考　間野 2013）

ティブ」なレガシーを後世に残しかねないと懸念されている。

6. レガシーの残し方

現在我々は、大正人が残してくれた「計画的で有形、かつポジティブ」な緑のレガシー、明治神宮の恩恵を東京で享受している。2020 年のオリンピック・パラリンピックを迎えるにあたって我々は、この緑のレガシーに輪をかけて有意義なレガシーを更に積み重ね、心豊かな環境でスポーツに励むことのできる東京へと発展させる責務がある。それこそが、これから我々が考えていかねばならない重要な課題であろう。

そのことを考えるために、本稿では1964年の東京オリンピックを振り返ってみたい。1964 年の東京オリンピックでは、日本の高度成長や技術立国化という点で、例えば東海道新幹線や首都高速道路が開通し、「計画的で有形、かつポジティブ」なレガシーが蓄積された。しかしながら、その陰で、日本橋が首都高の高架に隠れ、堀割が埋められるなど、江戸時代の伝統文化が、かき消されてしまった。国際的なメガイベントを開催するに当たっては、ポジティブなレガシーだけではなくネガティブなレガシーが、ジレンマとしてどうしても同時に生じてしまうことが多い。その点は致し方ないのであるが、それに妥協せず後世に残るポジティブな緑のレガシーを、一つでも多く未来の東京に残していきたいものである。

森林に関して言えば、1964 年の東京オリンピックで、「計画的かつ有形、ポジティブ」なレガシーが残せたのだという好例があるので紹介したい。それはオリンピック期間中には選手村として利用され、その後公園に転用された「代々木公園」である。以下が、代々木公園を設計するコンペを行った際に提示された募集要項（抜粋）である。

「東京都市計画代々木公園は、オリンピック東京大会後は、東京都唯一の森林公園として造成される。この地域は渋谷副都心と新宿副都心との中間に位置し、明治神宮内苑とともに極めて重要な区域である、従ってより良い公園に造成するため、その計画設計を懸賞募集するものである。」

（アンダーラインは筆者による）（参考：相川・布施 1981）

アンダーラインで示したとおり、代々木公園のコンペは、募集前からしっかりと、「森厳な明治神宮内苑に寄り添う森林公園」というコンセプトが練られていた。つまり、明治神宮内苑の森と相まって樹林を形成させ、風致に配慮することがしっかり明記されていた。

今では、代々木公園は大規模緑地の少ない東京にとって貴重な緑のレガシーとなった。閑静な風致に包まれた神宮内苑の森の傍らで、代々木公園が人々の賑わいを引き受ける役割を果たし、多くの人々に活用されている事実に異論はなかろう。このような緑のレガシーを積み重ね、後世に繋げることで、大都市東京でも森林との関わりが育まれ、豊かな森林文化が国民に定着していくのではないだろうか。

〔引用文献〕
相川貞晴・布施六郎 (1981)『東京公園文庫 27　代々木公園』, 郷学舎 ,122pp
IOC(2013) Olympic Legacy 2013、http://www.olympic.org/documents/olympism_in_action/legacy/2013_booklet_legacy.pdf#search='Olympic+Legacy+2013'
今泉宜子 (2013)『明治神宮　「伝統」を創った大プロジェクト』, 新潮社 ,351pp
内山正雄・蓑茂寿太郎 (1981)『東京公園文庫 20　代々木の森』, 郷学舎 ,118pp
越沢明 (2001)『東京都市計画物語』, ちくま学芸文庫 ,389pp
後藤健生 (2013)『国立競技場の 100 年』, ミネルヴァ書房 ,379pp
槇文彦 (2013) 新国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈の中で考える ,JIA MAGAZNE,10-15
槇文彦・大野秀敏編著 (2014)『新国立競技場、何が問題か』, 平凡社 ,198pp
松井光瑤ほか (1992)『大都会に造られた森　明治神宮の森に学ぶ』, 第一プランニングセンター ,143pp
間野義之 (2013)『オリンピック・レガシー　2020 年東京をこう変える！』, ポプラ社 ,285pp
森まゆみ編 (2014)『異議あり！新国立競技場　2020 年オリンピックを市民の手に』, 岩波ブックレット ,62pp

田中 伸彦（たなか・のぶひこ）
東海大学観光学部教授。東京大学農学部林学科卒業、博士（農学：東京大学）。（独）森林総合研究所上席研究員、林野庁研究・保全課研究企画官、などを歴任し、2010 年より現職。専門は、観光学、森林風致計画学、造園学、レジャー・レクリエーション学。1966 年生まれ。